

対語の音韻階層：なぜ「こっちあっち」と言われな いか

早田，輝洋

<https://doi.org/10.15017/2332708>

出版情報：文學研究. 74, pp.123-152, 1977-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

対語の音韻階層

—なぜ「こっちあっち」と言わないか*—

早 田 輝 洋

0. 序 1. 日本語 2. 朝鮮語
3. 満洲語 4. 音韻階層の類型論

0. 「あっちこっち」「ちぐはぐ」「やぶれかぶれ」「糊と鋏」「西も東も」「踏んだり蹴ったり」……等位接続した二つの成員からなるこのような語句を、やや不適当な名称ではあるが、対語¹と呼ぶ事にする。対語の各成員の結合の固さは様々である。「ちぐはぐ」を「*はぐちぐ」と言っては通じないかもしれないが、「*こっちあっち」は変でも分るであろう。「?東も西も分らない」と言う人も或いはいるかもしれないが、「西も東も……」の方が落ち着きがいい。対語は *yabure kabure* のようにその前後の成員の頭音だけが違うもの (*y~k*) も、*tigu hagu* のように前後成員の第1モーラだけが違うもの (*ti~ha*)、また *nori (to) hasami* のように全くと言ってよい程——長さまで——違うものもある。英語でも同様に、*here and there*, *scissors and paste*, *East and West*, *ladies and gentlemen* 等々種々の程度に順序の固定した対語が多数ある。

このような対語成員の前後を決める要因に昔から関心が注がれた。Hu-

* この拙稿の基礎は畏友故 Ted Huber 氏の研究にある。彼の研究や資料がなかったならば本稿は出来なかったであろう。

1 英語でも適当な言葉でない事を承知の上で漸次 *binomial* の語が用いられるようになって来ている。

ber(1974:66)の言うように、それには“意味的要因と音韻的要因の両者があると考えられ……どの対語一つを取っても普通二つ以上の要因が影響している。”相反する順序を生む要因が同時に作用する場合は、実現した順序を生じた要因がその際勝った事になる、と Huber は言う。

意味的要因については、Behaghel (1909:138, 1928:368), Abraham(1950), Malkiel(1968:338以下), Huber(1974) 等で様々に考究されている。例えば、時間の流れ, positive と negative, 社会的地位, 単数複数, 数列, 借用翻訳(原語の順序を踏襲した翻訳)等々種々の要因が考えられている。また音韻的要因については、Jespersen (1905:233, 1912の2版), Morawski(1927), Behaghel(1909:138, 142;1928:367以下), Haas(1942), Abraham(1950), Malkiel(1968), Bolinger(1962), Huber(1974, 遺稿²) が種々の言語を対象にして考察を巡らしている。中でもスペイン語についての Morawski, 英語についての Huber(1974), 日本語についての Huber (遺稿)が音韻に関して広範詳細に扱っている。

Huber(特に遺稿)は、対語の成員の前後関係を決める音韻的要因として、各成員の長さ(一般に「短～長」となる)の他に分節音の階層関係が作用していると考えていた。彼は特に日本語の対語の基底にある分節音韻階層の発見に努め、次のように書き遺している。“各言語はそれぞれの音韻的な特徴を持っている。この音韻的な特徴は、その言語ではどのような表現が一番よく使われるかを定める要素の一つになると思う。色々な言語を見て、その言語での音韻の影響を分析してほかの言語のものと比較すると、おもしろいし、意味がある結果が出ると思う。”

本稿では Huber の線に沿って種々の言語の対語に作用している分節音

2 筆者は Ted Huber から、その生前、未定稿の一部を読ませて貰ったり日本語その他の対語について論じ合ったりした者の一人である。今回拙稿を草するに当たりその遺稿(日本語で書かれている)の借覧を快くお許しくださった南不二男東京外国語大学教授に心から感謝の意を表したい。

階層を比較してみたいという興味から、手始めに現代日本語、現代朝鮮語、清朝時代の満洲語について予備的瞥見を試みたものである。筆者は現在、朝鮮語・満洲語ともに Huber が日本語について蒐集した程の多量の資料を集めていないし、その注目する所も彼のものほど広くはなく、対語の持つ或一つの音韻的局面に限られている。各言語についての本格的な調査はそれぞれの専門家による今後の研究に俟ちたいと思う。

1. 日本語の対語の本格的な研究については、筆者の知る限り T. E. Huber が先駆をなし、まだそれに続くものを知らない。しかし彼は多大の蒐集資料と日本語で書かれた未定稿を遺したまま他界した。ここに筆者は私意を以て彼の材料に加除訂正を施し、筆者の解釈で日本語対語の一面を提示しようと思う。とはいえ本章の根幹は Huber の着想とその蒐集した材料に依拠したものであり、筆者はその一部を整理したに過ぎない事を断っておかねばならない。

Huber は日本語の対語を多方面から攻究しており、意味的要因を考慮しつつ和語の前後部頭音、モーラ数、含まれている母音、アクセント、方言アクセントの対応等々の他、漢語についてもほぼ同様の調査をし、かつその場合には韻尾にも注意を集中し、中古漢語音、上古漢語音に互つて調べている。筆者がここで扱う範囲はそのごく一部であって、和語(漢語と和語とで出来ている対語を含む)の前後部頭音の階層の考察に限られる。

Huber は、各種辞書や友人仲間から実に多くの対語を蒐集しており、筆者もそれに加えてなお多くの例を求めたが、その結果は余りに各時代、各方言の混入したものとなり、共時的観点からは全く受容れ難いものになってしまった。そこで現代東京語の対語として筆者に認められないものや、共時的に対語としないものは全部削除する事にした。従って「てんやわんや」「わやくや」「じゃらくら」「かけひき」「きりもり」のような語は本稿の対語のリストから外してある。Huber も勿論その方向の努力を続け筆者を含め何人かの native speaker に確かめることをしてはい

たが、全面的な確認は完成していなかった模様である。或語句を対語と認定するかどうかは容易な問題ではないし、また“類似している言葉は一つとして数え……たとえば「ヌラクラ」や「ヌラリクラリ」は「前部 n～後部 k」の一例だけとして計算する”(遺稿)のであるが、その際どの範囲の語句を纏めて一例とするか等、なかなか一貫しえないものである。以下の筆者の材料の取り方にはなお、不適當なものが混入していたり、必要な例が漏れている場合もある事であろう。一つの粗っぽいスケッチとして見て頂きたい。

対語成員の前後を決める第一の要因は長さである。日本語の——そしておそらく世界中の多くの言語の——対語は、同じ長さでない場合は、他の矛盾する要因がより強く働かない限り、「短い成分～長い成分」の順序になるのが一般と考えられる。そこで前後同じ長さの成分からなる対語をまず見る必要がある。

Huber は前後同モーラ数の日本語の対語について次の頭子音階層を提示している。

∅³-t-d-n-y-s-z-p-h-b-m-w-k-g

この階層順位とは次のようなものである。例えば、同じ siro(白)という成分でも、上の順位で s より左にある ∅ (母音) で始まる aka(赤)と組みになれば aka~siro のように後に立つが、s より右にある k で始まる kuro(黒)と組みになると siro~kuro のように前に立つのが普通である。「クロシロを明らかにする」と言う事もあるが、これは漢語「黑白を明らかにする」の借用翻訳であろう。漢語については問題が別である。

Huber は擬音擬態語についても独立語の熟語についても分節音階層はこの同じ順序になるとしており、その順序は「母音—歯(茎)音—唇音—軟口蓋音」となっている。

3 Huber は ' で表わしている。子音がない(母音で始まるもの)という意味で、本稿では∅で表わした。

以下に筆者の選択による対語のリストを示す。最初に(共時的な)擬音擬態語や無意味形態素を含む対語、次に独立語が成分となって出来ている対語をあげる。この二類に分けたのは、擬音擬態語や無意味成分を含む対語の方が、その他のものに比して音的要因の作用が強いと考えられるからである。しかしすべての選択や分類はかなり大ざっぱなものであり、厳密に一貫しているとは言えない。なおここでは音韻階層を見るのが目的であるから、前後部頭音が同音の対語は入れていない。互に異なる母音で始まるものでも*ø*~*ø*という意味でこのリストには入れなかった。なお意味的要因の介在している対語もすべて入っているが、文法的要因(肯定~否定⁴、疑問詞~指示詞、等:「スキブスキ」「ソレカアラヌカ」,「ナニモカモ」「ドコソコ」等)によるもの、数列順(小さい数~大きい数)のものは、今例外が認められないので省いてある。

擬音擬態語的対語, 無意味形態素を含む対語

abe kobe, akuta mokuta, an pon-tan, ata huta, aya huya, betya kutya, bukabuka dondon, deko boko, dogi magi-suru, dokan bokon, don tyan-sawagi, dosa kusa, dota(n) bata(n), gata pisya <gata pisi>, giku syaku <gikku(ri) syakku(ri)>, gittan battan <gikkon battan>, hedo modo, iya haya, iza koza, maze koze, metya kutya, musya kusya, nora(ri) kura(ri), nura(ri) kura(ri), osiai hesiai, ottu kattu, petya kutya, pin syan, sidoro modoro, sinneri mutturi, suta kora, sutta monda, teki paki, tigu hagu, tin pun-kan, tinpun kanpun, tintin dondon, tintin kamokamo, tira(ri), hora(ri), titto-ya sotto, tiya hoya, tube kobe, tun ken, tyan pon, tyantyan barabara, tyaran

4 一般に「短~長」になるから問題にならない。しかし、Huberのあげている「イヤ(デモ)オウ(デモ)」は前後部とも母音(i~o)で始まっているのでここでは省いたが、否定の意味の語が前に来ている。「イヤ~オウ」の順序は、狭い母音が広い母音に先行するというかなり普遍的な音的要因によるものと考えられる。

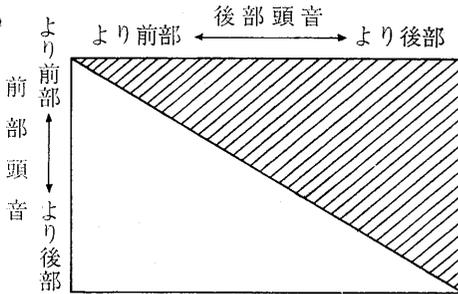
poran, tyoko maka, un(tomo) sun(tomo), urami turami, uro tyoro,
yabure kabure, yaki moki, yassa mossa, yattoko sattoko, zita bata,
zunguri mukhuri

独立語からなる対語

a-ko- <a(t)ti ko(t)ti, are kore等>, abu hati-torazu, age sage <agari
sagari等>, aka siro, ake(temo) kure(temo), ake suke, ake tate,
ama kara, ame kaze, ame tuti, ame tuyu, arai zarai, asa ban, asa
(na) yuu(na), ase mizu, asi kosi, atari hazure, atari sawari, ato
saki, atusa samusa-mo..., beni kane, bon kure, haru aki, hayari
sutari, hisya kaku, hundari kettari, huttari yandari, ienoko rootoo,
ikiruka sinuka, inu neko, irekawari tatikawari, iro koi, iro tuyu,
itareri tukuseri, itasi kayusi, kami simo, kati make, koppa mizin,
kuro siro-o-akiraka-ni-suru, kuso miso-ni-yuu, kyoo asu, masari otori,
matu take, meri hari, mesu osu, metta yatara-ni, miityan haatyan,
mino kasa, miso kuso-ni-yuu, miso-mo kuso-mo-issyo-ni-suru, mizaru
kikazaru, monomi yusan, nabe kama, nakazu tobazu, nakuko-to zi-
too-ni-wa..., nami kaze, nari huri, nasake yoosya, natu huyu, neho-
hahori, nemo hamo-nai, nobori kudari, nomi kui <nomazu kuwa-
zu>, nori ori, noruka soruka, nuki sasi <nukiasi sasiasi>, nyoobo
(o)-to tatami-wa..., o ha-utikarasu, oki husi, okkake hikkake, okuri
mukae, onba higasa, onbu(-sureba) dakko, onna kodomo, osi hiki
<ositari hiitari, ositemo hiitemo>, osokare hayakare, o-tyoo me-
tyoo, sasi hiki, sasute hikute, siro kuro, so-ko- <soreya koreya等>,
sugata katati, suki kuwa, surukoto nasukoto, taka hiku, tate yoko,
tema hima, teri huri, titi haha, tiritiri barabara, to-ka- <to-ni ka-
ku等>, tokiyo zisetu, tokkae hikkae, tonari kinzyo, tondari hane-
tari, tugi hagi, tuki yuki(-hana), turu kame, umi yama <umisen
yamasen等>, une(ri) kune(ri), uri kai <urikotoba-ni kaikotoba>,

uti soto, uturi kawari, ware hito-tomoni, yama kawa, yama saka,
 yari kuri, yari tori, yasetemo karetemo, yoru hiru <yo-mo hi-mo>,
 yomi kaki, yoroi kabuto, yosi asi, yuki take 桁文, zeni kane

Huberの方法に倣い、音韻階層の順位を仮定して図1のように配列し、前後部頭音の分布を見る。もし仮定した順位が正しければ図の斜線の部分の組合せだけがあって、左下半部の組合せはないはずである。



(図1)

そこで今、音韻の自然な類別を考慮に入れながら、なるべく右上半部に度数が集まるように上の材料から音韻階層順位を仮定すると、筆者の場合 Huber の順位と若干違って、ほぼ表1のようになる。Huber の順位は n, r を t, d の右に置き、滑脱音(半母音 y と w) をその調音的特質により—— y を歯(茎)音に、w を唇音に——割振ったが、筆者は n, r を t, d の左に置き、y, w を母音と同じ類に入れた。これによって例外が著しく少なくなった訳ではない(30個の例外が28個になったに過ぎない)。例外が殖えない限り、筆者の考える自然な音類に合わせようとしたものである。表の中の「*」は、さきのリストの擬音擬態語に類する対語の度数、数字は両リスト中の対語の全度数である。

表1を見ると171例中143例、8割強、は中央の斜線より上に度数が出ており、この143例には、意味要因等が介在していても、仮定した音順位と

後 部 頭 音

	φ	y	w	n	r	t	d	s	z	p	h	b	m	k	g	計
前 部 頭 音	φ		2	1	1	** 8	1	* 9	1	* 1	**** 12	1	** 4	*** 14		55
	y	1				2		* 2			1	** 2		* 6		14
	w									1						1
	n	1	1			2		2	1		4			** 6		17
	r															
	t		2				*	1	* 1	1	**** 4	*** 10	*	2	* 1	**** 7
	d						*	1					** 2	** 2	*	1
	s				1								2	*** 3	*	5
	z												*	1	1	3
	p								*	1					*	1
	h	1	1					*	1					*	1	2
	b							*	1						*	3
	m	2	2			1					2				*** 7	14
	k	1							2						3	6
g							*	1		*	1				3	
計	6	8		2	1	14	3	19	3	6	32	7	17	53	171	

(表 1)

それとが矛盾していない事を示している。しかし、*印に約11%，その他の対語に約18%の例外があるのは注目される。今音順位に矛盾するこれらの例につき、どんな要因が音韻的要因を上回って作用しているかを検討してみよう。擬音擬態語に類する語では次の6例が例外である。

「ドンチャン騒ぎ」：対応する清濁両音(d~t)の間には、k, g は問題だが、一般に階層関係はないと見てよからう。

「びんしゃん」：腰がピンとして始めて全体がシャンとするのか。前部第1音節母音がより狭く(i)，後部第1音節母音がより広い(a)という要因は、日本語に限らず普遍的なようである。

「ブカブカドンドン」：ブラスバンドの擬音であるが、その名の通り真鍮製の楽器の音が主で、太鼓の音は従という意味的要因が初頭音階層の要因を凌駕している例である。同時に、「びんしゃん」と同じくu~oという母音の「狭~広」の要因にも従っている。

「ぎくしゃく」⁵ : 同じく i~a という母音の「狭~広」の要因か。「びんしゃん」「どんちゃん騒ぎ」なども同じであるが、Huber も言うように、sy, ty のような拗音は直音と組みになった時に後に来る、という要因もあるようである。長さの要因の中に分節音の数や複雑さもある事は前々から言われている。もしそうであれば、直音より拗音の方が「長い」ことになり、他の要因に負けない限り、拗音を含む成員が後になりやすいわけである。

「がたびし」: 注5 参照。

「ギッタンバツタン」「ギッコンバツタン」: 初め何かきしむ音の出る動きがあって、次にその反動作用(バツタン)のある動作の擬音。つまり時間的要因。母音の「狭~広」(i~a)にも適っている。さきの注5も参照。

擬音擬態語に類する語以外では例外がかなりある。

「善し悪し」: 典型的な意味的要因の強い例。プラス要素が先に来る。尤も母音の「狭~広」(o~a)には適っている。

「乗り降り」: 時間的要因。同一人の動作でない時には、“先に”降りて貰う必要があるので駅などでは「降り乗り」と言う。その場合でも時間的要因である。

「なさけ容赦」: 成員の一方が漢語からなる対語では、「和語~漢語」になる例が現代語では目につく。他に「ものみ遊山」「こっば微塵」「こな微塵」「ときよ時節」「いえのこ郎党」「いわく因縁」「うじ素姓」「となり近所」「なみ大抵」等々。

「つきゆき(はな)」: 漢語では「雪月花」である。時間的要因。

「たてよこ」: 漢語「縦横」の借用翻訳か。「よこたて」とも言い、

5 k と g は清濁の違いだけとせず、g だけを階層上相当に左より、例えば w の右あたり、にもって行けば、g で始まるものすべて(「ぎくしゃく」「がたびし」「ぎったんばったん」)が例外でなくなる。

その方が伝統的のようである。Huberのように、tよりyを後にもって来れば例外でなくなる。英語では *lengthwise and crosswise* (たてよこ), 朝鮮語は *karo se:ro* (よこたて)。

「することなすこと」: 母音の「狭～広」(u～a)か。少なくとも共時的には、「する」が本来で「なす」は添え物のようである。

「はるあき」: 時間的要因。漢語「春秋」。

「降ったり止んだり」: 時間的要因。

「はやりすたり」: 時間的要因。

「優り劣り」: プラス要因が先に来る。漢語「優劣」。

「めすおす」: 母音の「狭～広」(e～o)か。漢語の「雌雄」「陰陽」は母音の「狭～広」と末尾子音の要因が大きく作用しているようである。

「ものみ遊山」: 「和語～漢語」の要因。上の「なさけ容赦」参照。

「まつたけ(うめ)」: 漢語「松竹梅」の借用翻訳か。

「めりはり」: 現代語としては母音の「狭～広」(e～a)であろう。

「ミーちゃんハーちゃん」「ミーハー族」: 母音の「狭～広」(i～a)か。

「きょうあす」: 時間の要因。

「くろしろ(をつける)」: 漢語「黒白(をつける)」の借用翻訳。普通は「しろくろ」。

「かみしも」: 上から下というのは普遍的な要因のようである。

「かちまけ」: プラス要因が先。漢語「勝負」。

「こっぱみじん」: 「こなみじん」も。「和語～漢語」。上の「なさけ容赦」参照。

上に見た通り、音階層順位に従わない例には、やや苦しいこじつけめいたものはあるにせよ、他の要因がない訳ではなく、それが音順位の要因以上に強く働いている、という事になる。たといそれを認めず上のすべてを

例外としても、8割強は仮定した音順位に矛盾しないのである。

日本語対語の前後成分の順位決定要因は、仮に次のように纏めて言う事が出来よう。

- a) 種々の意味的要因が作用する。
- b) 他の要因がより強く働かない限り、前部には短い成員、後部には長い成員が来る。⁶
- c) 前後の成員が同じ長さの場合は、他の要因がより強く働かない限り、次に示す階層スケール中で、相手成分の初頭音より自己の初頭音が左に位置する成員が前部成員となる：

$$\emptyset - \begin{matrix} y & n & t & s & p \\ w & r & d & z & h \\ & & & & m \\ & & & & b & k \\ & & & & & g \end{matrix}$$

上の順位は、もう少し網の目を粗くして言えば「母音・半母音—歯(茎)子音—唇子音⁷—軟口蓋子音」の順になっている。

時代、方言が違えば音韻階層も非常に違う事があるので、大阪方言の多くの例や、江戸時代の文献によく見える例で削ったものは多い。しかし、母音が前部で子音が後部という順位は時代・言語を超越してかなり普遍的のようである。万葉時代の日本語でも、「父」「母」を言う時、母の語が「オモ」であると「オモチチ」(方言形の「アモシシ」も)、母の語が「ハハ」であると「チチハハ」になっている。後者の表現は中国的と見られなくもないが、少なくとも当時の音韻階層にも従っていることであろう。(現代語でも t は p, h に先行している。) 勿論「ハハ」に比べて「オモ」の方が

6 「ホネ ミ(ニ コタエル)」「ハダ ミ(ハナサズ)」など「長～短」でありながら音順位に従っている例もある。

7 h が唇子音の位置に来てしまうが、h は共時的にバ行子音 (b) に対する清音であり、一般に p ~ b ~ h と交替する形態素が多々あること (例、1本 [pon], 2本 [hon], 3本 [bon]) から見ても不当ではない。勿論 h は歴史的に唇音に由来するものと、そうでないものがある。(注13参照)

一層幼児語的だったであろうという事も意味的要因になる。⁸ 乳幼児にとっては父よりも母の方が重要であろうから。

再び現代語に戻るならば、桃太郎の家来が「イヌ・サル・キジ」の順序であるのは、犬が人家の近くで餌を漁るという要因もさる事ながら、音順位によく適っている (i~s~k)。同じ猿でも蟹と合えば「猿蟹合戦」の順でなければいけない (s~k)。「イノ・シカ・チョー」の初めの二語も音的によろしい (i~s)。近世の文芸作品の名称通称にしても男女の組は女性先行の型になっていると共に音韻階層に矛盾しないものが断然多い——「小春治兵衛」のような例外はあるが、これとても文字の上では「短~長」になっている。2モーラ女性名の頭には「オ」をつけて母音始まりで呼ぶのが一般であるから、なおさら「女~男」の順になりやすい（「お染久松」など多数）。そうでなくても「小菊半兵衛」など[k~h]で矛盾するようでありながら「短~長」となっており、同じ長さなら「三勝半七」(s~h)のように音順位に当てはまる。「女~男」の順にすると「此糸蘭蝶」(k~r)、「白糸主水」(長~短)、「小紫権八」(長~短)のようになって音的に矛盾するものは通称では男女両名を併称せず、男の名だけをあげたり（「蘭蝶」「権八」⁹）、女の名だけをあげたり（「白糸」）する例もある。「安珍清姫」などは男名が先だが前後同モーラ数で音順は「母音~k」と典型的である。英語の *currey and rice* は、「ライスカレー」(r~k)と言った方が「カレーラ

8 奈良時代文献に見える「オモ」と「ハハ」、平安時代文献に見える「ママ」(乳母)と「ハハ」(母)の対立、および現代も使われる「ママ」(食物)については、人類言語の普遍的特徴の相から見た Jakobson (1962b:543) の記述が興味を惹く。“*papa* points to the parent present, while *mama* [ama, əmə 等も含まれる——筆者] signals a request for the fulfillment of some need or for the absent fulfiller of childish needs...”

9 「小紫権八」とすると[k~g]になるが、[k]が前になるのも問題なのかもしれない。(注5参照)

イス」(k~r)より、少なくとも筆者には日本語的に響くのも(和語は[r]で始まらないのにも拘らず)、また「ラジオ・テレビ」(r~t),「セ・パ両リーグ」(s~p)にしても音韻階層が作用していないとは言えない。「ラジオ」や「セントラルリーグ」が「テレビ」や「パシフィックリーグ」より重要だとか、人気があるとか言う事は難しかろう。「早慶戦」(s~k)はどちらを応援する人もこの順序で言う。「巨人阪神」は長さの問題である。

このように見てくると、和語を中心に仮定した音韻階層も、日本語内部で組合せられた対語では、時代、方言、和語、漢語、外来語の別を越えてかなり一般的に有効なのかもしれない。

日本語はひとまずこの程度にして、また最後の章で振返る事にする。

2. 朝鮮語は、ニュアンスの豊かな擬音擬態語的対語に富んでいる事で有名である。前後部全く同じ反復の対語が多いがそれは今扱わない。

まず前後同音節数で頭音のみの異なる対語のリストを初めに挙げ、次に前後同音節数ではあるが初頭音以外にも相違のある対語を列举する。現在の筆者の蒐集能力では前後部の音の似ていない対語の選択はかなり任意的であり、余り信頼性の高いものとは言えないであろう。漢語や、文法要因の介入しているものは原則として入れていない。非常に簡略化した音声記号により、前後部の間を区切って発音した音形を示した。音節末閉鎖音は内破音である。〈 〉内の語はその前の語に類するもので計算に入れない。

初頭音のみの異なる対語

obil kobil <ubul kubul>, oksin kaksin, ɔntʰil mɔntʰil, odoŋ podon, agin pagin <ɔgin pɔgin, ɔgit pɔgit>, ɔgim pɔgim, ogil pogil <ugil pugil>, aŋgil paŋgil <ɔŋgil pɔŋgil>, ɔŋɔ pɔŋɔ, ɔŋdɔŋ pɔŋdɔŋ, adɔaŋ padɔaŋ <dɔŋ pɔdɔŋ>, ɔndɔuk pɔndɔuk, urak purak, oltʰok poltʰok <ultʰuk pultʰuk>, olsʰok polsʰok <ulsʰuk pulsʰuk>, ollok pollok <ulluk pulluk, oltʰoŋ poltʰoŋ, ultʰuŋ pultʰuŋ, oltʰok poltʰok, ultʰuk pultʰuk>, olgoŋ polgoŋ

<olgaŋ polgaŋ, ulgɔŋ pulgɔŋ, olgin polgin, ulgun pulgun, ulgɔn pul-
 gɔn>, olgin polgin<ulgin polgin>,olgit polgit<ulgit pulgit>, alt'il salt'il,
 aŋgim saŋgim<ɔŋgim sɔŋgim>, ɔlgi sɔlgi<ɔlkʰi sɔlkʰi>, ollaŋ tʰollaŋ
 <ullɔŋ tʰullɔŋ>, ɛdoŋ tɛdoŋ, ɛgo tɛgo<egu tegu>, uksigil tɪksigil<uksil
 tɪksil>, ɔdʒuŋi t'ɔdʒuŋi, ɔmbɔŋ tɔmbɔŋ, ɔrɔn tɔrɔn, ɔurɔŋ tɔurɔŋ, algin
 talgin<ɔlgin tɔlgin>, ɔlgim tɔlgim-e <ɔlk'im tɔlk'im>, ɔlmɔŋ tɔlmɔŋ,
 al- tal-<allak'uŋ tallak'uŋ, ɔllɔk'uŋ tɔllɔk'uŋ, allaaŋ tallaaŋ, ɔllɔŋ tɔllɔŋ,
 allɔk talloŋ, ɔlluk tɔlluk, allak tallak, ɔllɔk tɔllɔk, allɔŋ tallɔŋ, ɔlluŋ
 tɔlluŋ, allorok tallorok, ɔlluruk tɔlluruk, allorɔŋ tallorɔŋ, ɔlluruŋ tɔl-
 luruŋ, arɔŋ tarɔŋ, ɔruŋ tɔruŋ, ɔrɔŋ tɔrɔŋ, arorɔŋ tarorɔŋ, ɔrurɔŋ tɔru-
 rɔŋ>, als'oŋ tals'oŋ<ɔls'uŋ tɔls'uŋ, ɔls'ok tals'ok, ɔls'uk tɔls'uk>,osun
 tosun, otʰol totʰol<utʰul tutʰul>, ɔkp'ak tʰɔkp'ak, ɔŋgi tʰɔŋgi<ɔŋgi tʰɔŋ-
 gi, uŋgi tʰuŋgi, ɔŋge tʰɔŋge, uŋge tʰuŋge>, olmak tʰɔlmak<ulmɔk tʰul-
 mɔk, olmok tʰɔlmok, ulmuk tʰulmuk>, olmaaŋ tʰɔlmaaŋ<ulmɔŋ tʰulmɔŋ,
 olmoŋ tʰɔlmoŋ , ulmuŋ tʰulmuŋ>, orɔŋ tʰɔrɔŋ <orɔŋi tʰɔrɔŋi>,ɔp'ak tʰa-
 p'ak<ɔp'ak tʰɔp'ak>, agi tʰagi, ogirak tʰogirak <ugirɔŋ tʰugirɔŋ,ogil
 tʰogil, ugil tʰugil>, ɔŋgit tʰɔŋgit<uŋgit tʰuŋgit>, omok tʰomok<umuk
 tʰumuk>, umul tʰumul<umultʰɔk tʰumultʰɔk>, ɔls'a tʰɔls'a<ɔls'igu(na)
 tʰɔls'igu(na)>, hidʒi pudʒi /hiji biji/, hisil pusil /hisir bisir/, ke:bal se:-
 bal, kɔmbul tɔmbul, muldɔmbɔŋ suldɔmbɔŋ, saŋgil paŋgil <saŋgit
 paŋgit, sɔŋgil pɔŋgil, sɛŋgil paŋgil, siŋgil pɔŋgil 等多数>, walga(da)k
 talga(da)k <wɔlɔɔ(dɔ)ŋ tɔlɔɔ(dɔ)ŋ, wakt'agil takt'agil, wɛŋgiraŋ tɛŋ-
 giraŋ, wɛŋgaŋ tɛŋgaŋ, wɛgak tɛgak 等多数>

前後成員が2分節音以上違うものを気付いた範囲内で挙げる。

a:m su, an pʰak, ap twi (-gal, -tʰil), andʒɔl pudʒɔl, andal pokt'al, allaaŋ
 t'ɔŋt'aŋ <ɔllɔŋ t'ɔŋt'aŋ, ɔllɔŋ t'ɔŋt'ɔŋ>, ɔtʰil pitʰil, ɔt'ik pit'ik <ɔt'ik
 p'it'ik>, ɔgim tʰigim, ɔ:dʒi tʰadʒi, ɔptʰirak twitʰirak, ɔŋmaaŋ tʰintʰaaŋ,
 ɔri mari, ɔltʰo taŋtʰo (ani ha-), ɔsit pisit, ilk'i s'igi, ɔsik pisik <ɔs'ik pi-
 s'ik>, hadɔŋ tʰidɔŋ<hɔdɔŋ tʰidɔŋ, hɔdɔk tʰidɔk>, hamburo tɔmburo,

hɔŋgɔp tʃigɔp, hɔt^huru mat^huru, hesil pasil, hiŋsuŋ seŋsuŋ, hindʒɔn man-
 dʒɔn, hiri mari, i- tʃɔ- <igɔt tʃɔgɔt, ɪrɔ tʃɔrɔ, yɔgi tʃɔgi 等多数>, imɔŋ
 kamɔŋ, iltʃ'uk yaltʃ'uk, kaman sap'un, kalp^haŋ tʃilp^haŋ <karisan tʃiri-
 san>, karo(tʃina) se:ro(tʃina), kasi pɔsi, kena yena, ki- tʃɔ- <kiman tʃɔ-
 man, kirɔŋsɔŋ tʃɔrɔŋsɔŋ 等々>, kombi imbi, komtʃ'ak tals'ak, kondire
 mandire, kuŋt'uŋ maŋt'uŋ, kwiduw tɛ:duŋ, k^hɔŋ(t^hwidit) p^hat(t^hwidit),
 k^hɔŋtʃ^hil p^haltʃ^hil <k^hɔŋk^he p^halk^he>, k^hɔŋp^hal tʃ^hilp^hal, mɛ:ŋk'ɔŋ tʃi:ŋ-
 k'ɔŋ, midʒual kodʒual, mi:ltʃ^hirak ta:ltʃ^hirak, mit'uri k^hot'uri, mit'u-
 ri so:kt'uri, non(t^hil) pat(t^hil), nun k^ho, o- ka- <odaga kadaga, wat'a
 kat'a 等々>, ɔŋsɔŋ maŋsɔŋ, orirak nɛrirak, pam nat, purya sarya, sa:n-
 san tʃɔgak, sɛgin palt'ak <sigin pɔlt'ɔk>, sɔt^hɔl kut^hɔl, sɛŋge maŋge,
 sɛ:sɛ t^himt^him, sidirɔk pudirɔk <sidik pudik, sidil pudil>, sisi pudʒi,
 s'ikt'uk k'ɔkt'uk, sisi t'ɛt'ɛ-ro; son pal, soya pɛyaŋ <sɔyaŋ pɛyaŋ>, tatʃ'a
 kotʃ'a-ro, til- na- <tina nana, tillak nallak 等々>, twidʒuk paktʃ'uk,
 tʃana k'ɛ:na, tʃugo patk'o <tʃugɔmi patk'ɔmi>, ugɔk tʃigɔk, wɛt'ɪl pit'ɪl
 <wɛt^hɪl pit^hɪl>

朝鮮語は母音子音を僅かに変えるだけでニュアンスの変る例が沢山ある。従って数を問題にする時は「異り語数」で数えると僅かな変異の組合せで特定の音が非常に多く数えられる。それ故「延べ語数」で数えるべきなのであるが、今大量調査をする事は出来ないで、似かよった語は一つに纏めて異り語数で数えることにした。例えば, agin pagin, ɔgin pɔgin, ɔgit pɔgit は ɔ~p の例 3 と数えず、一纏めにして 1 と数える。実際にこれは難しい事で、どれを纏めどれを纏めないかはかなり任意的であり、native speaker に質してみても、当然の事ながら、程度の差で任意的であった。

上の資料を日本語の場合と同様に図表にしてみよう。リスト中の全対語

数を記入し、前後部初頭音のみの異なる例が含まれていればその数字の前に、数に関係なく(数が多過ぎるので)、*印を一つ付す。濃音 p', t', s', k' は対語では一種の強めとして機能する事が多く、また出現する事も少ないので、それぞれ p, t, s, k の中に含めた。また上のリスト中にそのようになっているが, yogi tʃogi, wat'a kat'a などの語頭の y, w のように共時的にそれぞれ i, o に由来するものは i, o に含め、y, w としては数えない。¹⁰

後 部 頭 音

		ϕ	h	y	w	m	n	k ^h	k, k'	s, s'	tʃ ^h	tʃ, tʃ'	t ^h	t, t'	p ^h	p, p'	計		
前 部 頭 音	ϕ			1		* 3	1		* 4	* 5	* 1	17		* 18	1	* 22	73		
	h					3				1		2		1		* 3	10		
	y																		
	w													*	1		1	2	
	m							1	1	*	2	1		1				6	
	n							1									1	2	
	k ^h											1				2		3	
	k, k'	1		1		2				* 3		2		*	3			13	
	s, s'					1			2			1	1	1			*	6	12
	tʃ ^h																		
	tʃ, tʃ'									1								1	2
	t ^h																		
	t, t'						1		1									1	3
	p ^h																		
	p, p'							1			1								2
	計		1		2		9	3	2	9	12	2	23	1	25	3	36	128	

(表 2)

資料が少ないので余りはっきりした結果は出ないが次のような音韻階層を仮定すると表 2 が得られる。

10 この点は余り厳密でない。kena yena ‘そこもここも’の後部初頭音yは、一貫性を持たせるならばiに数えるべきであるが、ここではyに数えた。ただ朝鮮語でも滑脱音yは、wや母音と共に一つの類として考えているので実害はない。

ϕ							
h	m	k ^h	s	tʃ ^h	t ^h	p ^h	
y	n	k	s'	tʃ	t	p	
		k'	s'	tʃ'	t'	p'	
w							

右上半分に128例中116例, 9割も集まっているという事は日本語の8割強に比してよい成績であるが, 資料の数と信頼性の点で劣っていると言わざるを得ない。

次の12例が仮定した音順位に従わない。

kombi imbi ‘続けざまに重なって’.

kena yena ‘そこもここも’.

kondire mandire ‘ぐでんぐでん’. 母音の「狭～広」(o～a)か。

kunʃt'uŋ maŋt'uŋ ‘僻境にしてつまらない’. 母音は「狭～広」(u～a)になっている。

s'ikt'uk k'ɔkt'uk ‘べちゃくちゃ(喋る)’. 母音の「狭～広」(i～ɔ)か。

sɔt^hɔl kut^hɔl ‘ぎこちなく’.

seŋge maŋge ‘合点がいかない’. 母音は「狭～広」(e～a)になっている。

tʃana k'ɛ:na ‘寝ても覚めても’. 日本語と同じ語順である. 時間的要因。

tatʃ'a kotʃ'a-ro ‘いきなり’.

til-na- ‘入(ったり)出(たり)’. 日本語の逆である. 母音の「狭～広」(i～a)か。

pam nat ‘夜昼’. 漢語の逆で日本語と同じ. 音節末音の階層を調査する必要がある.¹¹

11 “上代中国語には三種類の尾韻があった. …「AやB」式の熟語では入声の語は後部になりがちであり, 陽声の語は前部になりがちであるが, 陰声の語は, 一緒に結合している語の種類によって前部になるか後部になるかが決まる. …英語の語末音のことだけを見ると, 母音に近い方の音で終る語が後部になりがちで, 無声の閉鎖音に近い方の音で終る語が前部になりがちである. ……この語末音の順序は上代中国語の語末音の順序とちょうど逆になっている” (Huber 遺稿).

purya sarya ‘あわてて’。母音の「狭～広」(u～a)か。

朝鮮語の音韻階層は「母音・滑脱音—軟口蓋音—鼻音—歯(茎)音—唇音」
という事になる。

なんら系統的な調査はしていないが、筆者が上の仮定を立てるより遙か前に或 **native speaker** が思いつくままに教えてくれた童話の題名——
kyonu tfjɔnyo ‘牽牛織女’, yɔu (wa) nagine ‘狐と旅人’, yɔu (wa)
turumi ‘狐と鶴’, higbu (wa) nolbu ‘興夫とノルブ’, hennim tallim
‘お日さまとお月さま’, tʰok'i (wa) kɔbuk ‘兎と亀」——は、漢語もあり
長さの問題もあるが、最後の例を除いてすべてこの階層順位に適っている。
この中の唯一の例外「兎と亀」(tʰ～k)は借用翻訳であろう。

3. 満洲語文語の転写は Möllendorff (1892) の方式による。ただ、**u**
は **û** とした。c, j は破擦音, p, t, k, c と b, d, g, j の対立は有声対無
声ではなく、緊張性対弛緩性と考えられる。k, g, h は、a, o, û の前
でそれぞれ [q', G, h], e, u, i の前でそれぞれ [k', g, x] とされている
が、ここで扱う限りそれは母音の問題であって、この「より奥の」k, g,
h と「より前の」k, g, h とを区別する必要はないようである。満洲語は
特に中国語からの借用翻訳が多くあるようで、注意しなければならない。
その影響の最も少ない所として期待されるのは、擬音擬態語的な対語、前
後部成員の音的に類似した対語であろう。

以下の対語のリストは、朝鮮語の例に倣い、まず前後部頭音のみの異なる
対語を挙げ、次に前後部第1音節のみの異なる対語を挙げる。従って前
後成員の音節数の等しいものに限られる。前後部ともに独立語からなる熟
語は数十例を得たが余りに中国語の語順と平行しているのが多く、今回は
省いた。中国語からの、及び中国語への、借用翻訳は別途研究すべき課題
である。それ故ここに挙げるリスト中の語彙数は朝鮮語より更に少なくな
っている。

前後部初頭音のみの異なる例

a fa, a ta, abišaha dabišaha, absi yabsi, acu facu, acun de cacun, aibi haibi akû, aimin taimin, ala šala, anggari janggari, ara fara, arkan karkan, asaha fasaha <ashan fashan>, ederi tederi, elen telen akû, en jen, enderi senderi, enggele senggele akû, erei terei, erken terken, eyen seyen akû, gar miyar, gari mari, gersi fersi, guwele mele <guwele gala>, giyan fiyan, i ci, kaka faka, kakari fakari, kara fara, kata fata, katar fatar, kûwai fai, kûwak cak, kûwang cang, lata jata, mohori sohori, ne je, o šo, uttu tuttu <ubaingge... tubaingge, ubaka tubaka>, umburi cumburi <umbuci cumbuci>, waiku daikû, waliyame fuliyame gama-, wangga šangga

前後部初頭音節のみの異なる例

alha bulha <alga bulha>, arun durun akû, arun furun, baime suime, baita sita, bekdun gakdun, bireme hereme, buran taran, casi akû ebsi akû, cici goci, ebi habi, ebsi casi akû, ebuhu sabuhû, encu facu, engki congki, garu turu, geri fari, heni tani, ine mene, kaltu multu, kalu mulu, kesiri masiri, kûlin calin, murin tarin, nasacuka usacuka, ušan fašan,

さきの朝鮮語と同様に出現度数を図表にし、前後部頭音のみの異なる対語を含む度数には*印を付す(表3)。

後 部 頭 音

	∅	w	y	g	k	h	m	b	f	l	n	j	c	š	s	d	t	計	
∅																			34
w			*																3
y																			
g							*						*						8
k									*					*					13
h																			1
m															*				1
b																2			5
f																			
l													*						1
n																			2
j																			
c																			2
š																			
s																			
d																			
t																			11
計	2	1	2	1	3	7	1	17		4	8	3	7	3	3	11		70	

(表 3)

表 3 に見るように音韻階層を「∅-w-y-g-k-h-m-b-f-l-n-j-c-š-s-d-t」のように仮定したが、階層関係はこれほど厳密には現われず、「母音・滑脱音—軟口蓋音—唇音—齒(茎)音」の 4 段階の階層が見られる程度である。表の斜線下部に出現する例は 5 例約 7% で、日本語の 16%、朝鮮語の 9% より少ないが、これは資料数が少ない事に起因すると考えられる。

この表に p と r が出ていない。歴史的には満洲語の p は清朝時代には f になっており、清朝時代の p は中国語など外国語からの借用語や擬音擬態語に多く出て来る。しかしそれも語頭音を替えない(母音を替える)対語や疊語には多く出現しながら、語頭音を替える対語に使われないのは興味ある事である。r はいわゆるアルタイ語では語頭に立たず、対語の成分初頭音としても立っていない事が分る。

なお仮定した音韻階層に従わない 5 例は次のものである。『清文彙書』(乾隆 16 年—1751—初刻)の訳語を付す。

nasacuka usacuka, 「凄凄切切」

casi akû ebsi akû, 「莫往莫来。」 ebsi casi akû の項には「不能定

主意疑惑。與 *ebsi akû casi akû* 同」とある。どちらの順序にも言った対語であろう。

cici goci, 「往後不是往前不是不強不勝厭然退縮之貌。」母音の「狭～広」(i～o)か。

bekdun gakdun, 彙書 *bekdun* の項に「債負之債與 *juwen usen* 同。與 *bekdun gakdun* 同。債多之意」とあり、同じく *gakdun* の項に「債負。 *bekdun gakdun* 同。」とある。母音の「狭～広」(e～a)か。

bireme hereme, 「全。都。一切。一概」母音の「狭～広」(i～e)か。

bireme の方が *hereme* より一層完全に副詞的になっていたか。

なお満洲語の擬音擬態語的対語は、上のように語頭子音を替えるものよりも寧ろ母音を替えるものが多い。¹² *kacar kicir*, *fiyak* [fyak] *fik*, *bukdu bakda* の如き、前後同音節数で同音で始まり、母音のみの違う(ただ [q] と [k] などの違いはある) 対語を気付いた限り 193 語について、各第 1 音節母音の組合せを調べた所、以下の如くであった。

前部	後部	度数
a	i	54
e	a	56
i	a	16
o	a	18
u	a	35
û	a	8
その他の組合せ		6
計		193

即ち、前部第 1 音節の母音が a であれば、後部第 1 音節の母音は i, 前部第 1 音節の母音が a 以外であれば後部第 1 音節の母音は a である。それ以外の組合せの例は僅か 3% ほどに過ぎない。

4. 前章までに日本語・朝鮮語・満洲語の音韻階層を調べてみた。今各

12 この点、ややタイ語などに似ているようである(Haas1942)。

言語の分節音を或程度の音類に纏めた度数を表4に示す。日本語は10以上、朝鮮語・満洲語は3以上の度数を円で囲んだ。

後部頭音

		母音 滑脱音	歯音	唇音	軟口蓋音	計
日 本 語	前部頭音	母音 滑脱音	2 ②⑤	2 ②②	2 ②①	70
		歯音	4 2	8 ③②	2 ②①	66
		唇音	6	4	2 1	26
		軟口蓋音	1	3	5	9
		計	14	42	62	53

後部頭音

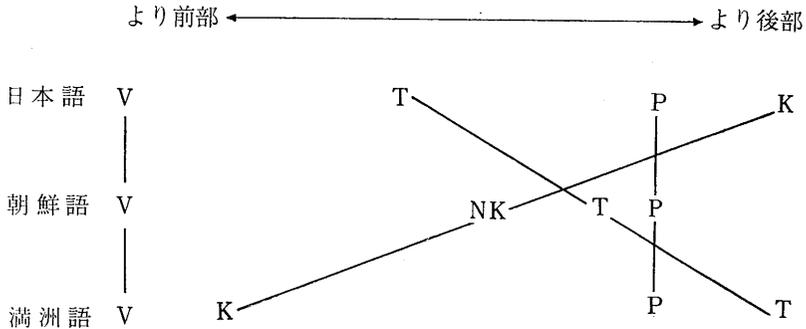
		母音 滑脱音	鼻音	軟口蓋音	歯音	唇音	計	
朝 鮮 語	前部頭音	母音 滑脱音	1 ⑦	4 ④	4 ④⑥	2 ②⑦	85	
		鼻音		3 ③	4 ④	3 ③	10	
		軟口蓋音	2	2	9 ⑨	1	14	
		歯音		2	4 ④	3 ③	8 ⑧	17
		唇音		1		1	2	
		計	3	12	11	63	39	128

後部頭音

		母音 滑脱音	軟口蓋音	唇音	歯音	計	
満 洲 語	前部頭音	母音 滑脱音	1 ③	10 ⑩	2 ②③	37	
		軟口蓋音		15 ⑮	7 ⑦	22	
		唇音		2	4 ④	6	
		歯音	2	1		2	5
		計	3	6	25	36	70

(表4)

「母音・滑脱音」をV, 「鼻音」をN, 「歯(茎)音」をT, 「唇音」をP, 「軟口蓋音」をKで略記して各言語の階層順位を比較すると図2のようになる。



(図2)

この図に見る通り、いずれの言語に於ても母音・滑脱音は、どの音類と組んでも前部に立ちやすく、唇子音系統の音(日本語のhを含めて)は後部に立ちやすい、という事が分る。しかし歯(茎)子音と軟口蓋子音は言語によって顕著に違う。歯(茎)音は、日本語では母音・滑脱音以外のどの音類と組んでも前部に立ちやすいのに対し、満洲語ではどの音類と組んでも後部に立ちやすい。軟口蓋音は、日本語ではどの音類と組んでも後部に立ちやすいのに反して、満洲語では母音・滑脱音以外のどの音類と組んでも前部に立ちやすい。朝鮮語は日本語と満洲語の中間の位置を占めている。

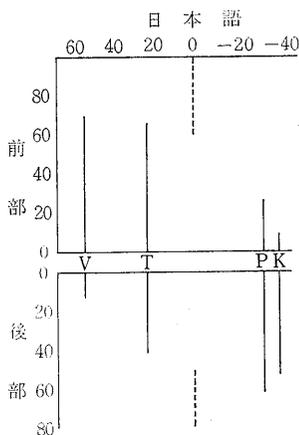
表4で見ると、そこで仮定されている各言語の音韻階層順位には度数の上からは矛盾がない。即ち表4の階層中で、任意の二つの音類*i*と*j*について*i*が*j*より左にある場合、交点*ij*の度数はすべて交点*ji*の度数より大である。例えば、日本語の階層順位では、歯(茎)音は唇音より左にあり「歯(茎)音～唇音」の度数32は「唇音～歯(茎)音」の度数4より大である。しかし階層関係が真に厳密に働いているならば、*ji*の度数(斜線より下の度数)は零でなければならない。さきに各語につき、このような*ji*の対語に他の音的要因や意味的要因などが音韻階層以上に強く作用しているのではないかと若干の検討を試みたわけであるが、かなり苦しい説明が

あっただけでなく、全然説明出来ないものもあった。斜線下部の(jiの)例外語は、考慮に入れる例を多くすれば多くするほど、ということは実際には擬音擬態語的でない対語を多く数に入れるほど、高率に出て来るようである。例外率、日本語約16%(171語中28語)、朝鮮語約9%(128語中12語)、満洲語約7%(70語中5語)を見ても分るであろう。このことは、出現度数の多寡に関係のない、音相互間の優位関係という——Huberの考えていたような——階層よりも寧ろ、他の音と関係なく前部頭音として立ちやすい音、後部頭音として立ちやすい音、というその音自体の出現度数に現われる傾向が、対語‘全体’としては、問題になるのではなかろうか。そこで、この観点からも上に調べた範囲内で検討を試みる。

各音類が前部頭音として立つ度数、後部頭音として立つ度数、及びその差を示すと次の通りになる。

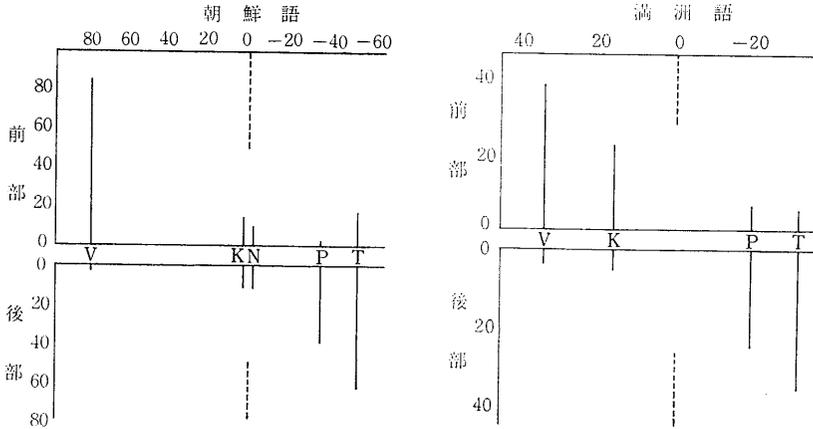
	日本語				朝鮮語					満洲語			
	V	T	P	K	V	N	K	T	P	V	K	P	T
前部頭音	70	66	26	9	85	10	14	17	2	37	22	6	5
後部頭音	14	42	62	53	3	12	11	63	39	3	6	25	36
差	+	56	24		82		3			34	16		
	-			36	44		2	56	37			19	31

上の値につき、横軸に差をとり縦軸に度数をとると図3のようになる。



(図3-1)

対語の音韻階層(早田)



(図3-2)

度数を問題にした図3が、音類相互の優位関係を問題にした図2と趣の違うのは当然である。朝鮮語の歯(茎)音(T)と唇音(P)の関係が満洲語と等しくなり、この二言語がかなり似た感じになっている。どの言語でも母音・滑脱音は前部に立ちやすく、唇音は後部に立ちやすい。歯(茎)音は、朝鮮語と満洲語では後部に立ちやすく、日本語では前部的である。軟口蓋音は日本語では後部に立ちやすく、満洲語では前部に立ちやすいが、朝鮮語では前部14後部11でどっちとも言えない。

今、各音類について見たが、個々の分節音についてはどうであろうか。上と同様の事を次に試みよう。

(日本語)

	∅	y	w	n	r	t	d	s	z	p	h	b	m	k	g
前部頭音	55	14	1	17	29	6	11	3	2	6	4	14	6	3	
後部頭音	6	8		2	1	14	3	19	3	6	32	7	17	53	
差	+	49	6	1	15		15	3							3
	-					1		8		4	26	3	3	47	

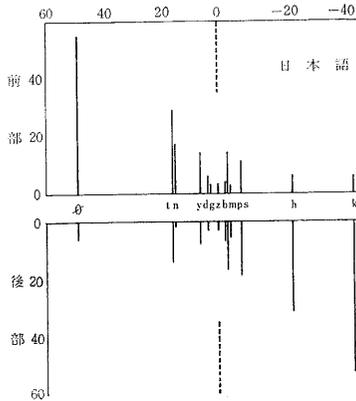
(朝鮮語)

	∅	h	w	y	k ^h	k, k'	m	n	s, s'	tj ^h	tj, tj'	t ^h	t, t'	p ^h	p, p'
前部頭音	73	10	2		3	13	6	2	12		2		3		2
後部頭音	1			2	2	9	9	3	12	2	23	1	25	3	36
差	+	72	10	2		1	4								
	-				2			3	1	2	21	1	22	3	34

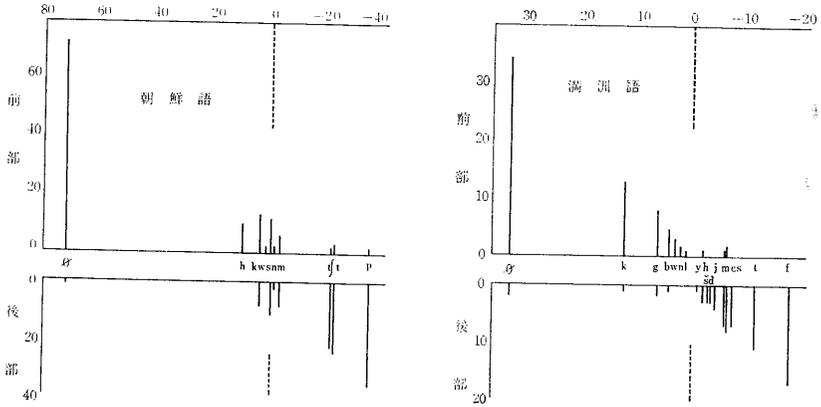
(満洲語)

	∅	w	y	g	k	h	m	b	f	i	n	j	c	š	s	d	t	
前部頭音	34	3		8	13	1	1	5		1	2		2					
後部頭音	2		1	2	1	3	7	1	17				4	8	3	7	3	11
差	+	32	3		6	12			4		1	2						
	-			1			2	6	17				4	6	3	7	3	11

前と同様、横軸に差をとり縦軸に度数をとって図4を得る。図では朝鮮語の p, p' や k, k' などの表記は、それぞれ p, k などで略記し、また p^h, t^h, tj^h, k^h は度数が少なく図が繁雑になるので省略した。同じく日本語の r と w も省略した。



対語の音韻階層(早田)



(図4)

図で見ると朝鮮語の p, p' や満洲語の f が唇音であるにも拘らず歯(茎)音を越えて後部頭音として第1位に立っているのは注意される。朝鮮語の tf, tf' の音と t, t' の音が殆ど同じ出かたをしているのも目を惹く。いずれの言語に於ても ø (母音で始まるもの) とそれ以外の音とは大きな隔りのある事が分ろう。

英語で前部頭音として立ちやすい音は, h, w, r, 母音, のような鳴音 (sonorant) で, 後部頭音として立ちやすい音は, d, b, g のような有聲閉鎖音だという (Huber 1974). スペイン語は Morawski (1927) によると「母音・h—口蓋子音—歯子音—唇子音」というはっきりした階層があり, その法則は “si rigoureusement observées en espagnol qu'on y trouve à peine des exceptions.” と言っているが, Abraham (1950) によると例外もかなりあるようであり, 資料を多くとれば出現傾向のようなものになるのであろう。このスペイン語の音階層 (V K T P) は朝鮮語 (図2参照) とよく似ている。

図4の横軸上で左右両端に近いものほど特徴が顕著なわけである。すべての言語で母音は最も前部に立ちやすいものであり, その他の特徴で前部に立ちやすいものは, 日本語では t, n, 朝鮮語では h, 満洲語では k であ

る。後部に立ちやすいものは、日本語では **k**, ついで **h**, 朝鮮語では **p, t, tʃ**, 満洲語では **f, t, s** である。母音が前部頭音として立ち、子音が後部頭音として立ちやすいという事は、人間言語の普遍の特徴であろう。しかしその他の点では個別言語の特徴が現われているようである。満洲語の **f** や日本語の **h** が、歴史的に **p** に由来している事を考えると¹³, 図4から見ても朝鮮語と満洲語は非常によく似たタイプである事を示していると言えるが、日本語は全く違った型になる。日本語と満洲語で **k** と **t** の位置が非常に違うのは興味があるが、いずれの言語に於ても **p** や **p** に由来する音が後部に立ちやすい事、また **t** も前後部いずれかの顕著な位置に立ちやすい事は (**k** が朝鮮語で顕著な位置に来ない事と相俟って) Jakobson-Halle (1962) の **a, p, t** を頂点とする音体系の基本三角形を思わせる。

さきにも見たように、朝鮮語・満洲語はスペイン語とほぼ同様の出現傾向順位を持っている。対語全体の前後部頭音に関する限り、この三言語は **anteriority** の階層を持っていると言えるかもしれない。日本語は、母音でない場合は **coronal** である時に前部に來るが、母音も含めて一つの弁別素性で記述する事は難しい。英語は鳴音的であるほど前部に立ちやすくなる。鳴音性(**sonority**)の階層であろう。

対語成員初頭音の階層は、以上に見て来たように意味とも関連して統計的に現れる「ゆるい」階層であろうが、幼児の言語音習得順序や人類言語に普遍的な音素目録の存在様態(Jakobson 1962 a 他多数)のような普遍文法に存する階層のみならず、個別言語の文法の中に立てなければならないもっと厳密な音韻階層という事も述べられて来ている。Zwicky(1972)は、

13 しかし、日本語の真の擬音擬態語の **h** は **p** に遡らない。[**h**] が言語音でなかった時は息の音に過ぎず、当然文字に書かれない。「あ(い)」「はい=yes」, 「い」「ひん=馬の鳴き声」(万葉集2991の有名な例「馬聲蜂音石花蜘蛛」はイブセクモ——おそらく [i**mb**u**f**erumo] ——と読ませている)。s に由来する **h** もある。例えば感動詞の「はて」は、「きて」の [**s**] が弱化して [**h**] になったものであろう。「きてきて」「はてきて」「きてはて」「はてはて」すべての組合せが歴史的にはある。

発話速度を速めた場合の分節音の脱落から英語について「母音-滑脱音-r-l-n-m-η-摩擦音-閉鎖音」の音韻階層を仮定している。Hankamer-Aissen (1974)によるとパーリ語やハンガリー語には隣接した分節音の同化に際してかなり厳密な鳴音性階層があるという。即ち、パーリ語では(我々の方向に並べれば)「r-y-v-l-鼻音-s-閉鎖音」、ハンガリー語では、ほぼ「l-r-y-鼻音-摩擦音-閉鎖音」の階層があるという。対語中に見られる音韻階層と、文法の中に働いている音韻階層とがどういう関係にあるか、なお調べなければならない課題である。

今、音相互間の相対的優位関係という階層の仮説は強すぎるとして、他の音と無関係の、個々の音自体の出現傾向の階層へと一步後退したのではあるが、最小対立をなす前後成員に前者の意味での階層性が認められ、最小対立から離れるに従ってその階層性が弱まって来るという事自体が、また一つの階層性にほかならない。

今回の調査にあっては、資料が質量ともに不十分で全くの試みの域を脱しなかったばかりでなく、多くの誤りを犯している所もあろうかと思われる。いずれ根本的なやり直しが必要になる事であろう。

博雅君子多方惠教を冀うのみ。

引用文献

- Abraham, Richard D. (1950) "Fixed Order of Coordinates," *The Modern Language Journal* XXXIV 276-287.
- Behaghel, Otto (1909) "Beziehungen zwischen Umfang und Reihenfolge von Satzgliedern," *Indogermanische Forschungen* XXV.
- (1928) *Deutsche Syntax* III, Heidelberg.
- Bolinger, Dwight L. (1962) "Binomials and Pitch Accent," *Lingua* XI 34-44.
- Haas, Mary R. (1942) "Types of Reduplication in Thai," *Studies in Linguistics* Vol.1 No.4 1-6.

- Hankamer, Jorge and Judith Aissen (1974) "The Sonority Hierarchy," *Papers from the Parasession on Natural Phonology*, CLS 131-145.
- Huber, T. E. (1974) "Law and Order for Binomials," 『桜文論叢』 66-79.
- Jakobson, Roman (1962a) "Kindersprache, Aphasie und allgemeine Lautgesetze," *Selected Writings I*, 328-401, Mouton, 's-Gravenhage, ursprünglich veröffentlicht in *Språkvvetenskapliga Sällskapets Förhandlingar*, 1940-1942, und separat, Uppsala 1941.
- (1962b) "Why "Mama" and "Papa"?" *Selected Writings I*, 538-545, Mouton, 's-Gravenhage, originally published in *Perspectives in Psychological Theory*, dedicated to Heinz Werner (New York, 1960).
- Jakobson, Roman and Morris Halle (1962) "Phonology and Phonetics," *Selected Writings I*, 464-504, Mouton, 's-Gravenhage, originally published in *Fundamentals of Language*, Mouton, 1956.
- Jespersen, Otto (1905¹, 1912²) *Growth and Structure of the English Language*, Leipzig.
- Malkiel, Yakov (1968) "Studies in Irreversible Binomials" *Essays on Linguistic Themes* 311-355, Basil Blackwell, originally published in *Lingua* VIII:2 113-160 (1959).
- Möllendorff, P. G. von (1892) *A Manchu Grammar with Analysed Texts*, Shanghai.
- Morawski, J. (1927) "Les Formules Rimées de la Langue Espagnole," *Revista de Filología Española* XIV, 113-133.
- Zwicky, Arnold M. (1972) "Note on a Phonological Hierarchy in English," *Linguistic Change and Generative Theory* R. P. Stockwell and R. K. S. Macaulay, eds. 275-301, Indiana Univ. Press.

1976年10月